

マイナースポーツの普及のための方策

Measures for the dissemination of minor sports

1K10C451-8 山下貴大

主査 吉永武史先生

副査 深見英一郎先生

【序章】

私は小学校から中学校まで水泳を、そして高校からボート競技を行ってきた。高校から始めたボート競技であるが高校3年生のときには日本代表にもなった。以前、テレビドラマになったこともあるボート競技であるが、社会的認知度は低く、ボート競技のある高校においても、具体的にどんなスポーツであるかを説明できる友人は誰もいなかった。私自身も、ボートを始めるまではボート競技の存在さえも知らず、まさに未知のスポーツであった。

このように日本ではマイナースポーツとしてのイメージが強いボート競技であるが、オリンピック種目にも選ばれるほど世界では盛んに行われている競技である。他方で水泳は、日本でもメジャーなスポーツの1つであり、もちろんオリンピックの種目にも入っている。しかし、ボート競技と水泳には競技上の類似点が多くあると私は考える。ボートはオリンピック種目にも関わらず、日本ではマイナースポーツである。しかし水泳は、日本においてもメジャースポーツである。したがって、これらの競技の類似点と相違点を明らかにすることで、ボートの競技人口の増大とファン獲得に向けた手がかりを得ることができるのではないかと考えた。

そこで本研究では、マイナースポーツの普及のための方策について検討することとした。なお、研究の方法については、ボート競技と水泳に関連する文献資料とインターネット情報を用いて、理論研究で進めていくこととした。

【第1章】イギリスと日本におけるスポーツの違い

第1章では、イギリスと日本におけるスポーツの違いについて述べた。

島国であるイギリスは変化に富んだ長い海岸線があり、かつ内陸の水路網も発達している。そのため、川の交通では手漕ぎボートが輸送の主役であり、たくさんの船頭が存在したといわれている。王室や主教、貴族、都市商人が、多くのオールを備えた艇でテムズ川を行き来する際に漕ぎ手を派手に着飾りどちらが早い競争したことから、娯楽や競漕用へとボートが移行したとされている(クリストファー, 2009)。さらに、19世紀以降は名門大学にも広がり、人格形成の上でスポーツの効用が強く認識され、高等教育などに学び、将来を担う若い世代を中心に、スポーツが社会全般に広く浸透していった。この

ような流れの中で、現代スポーツとしてもボート競技は発展していった(山田, 2002)。ボート競技を応援する観客もただレースを観るだけではなく、ファッションを競う場でもあり、華やかなガーデン・パーティの場でもあったとされる。晩餐会や舞踏会、観劇などと同じように、スポーツ観戦をゴージャスな社交の場として活用していた(山田, 2002)。

一方、日本で人気のスポーツ(登録者の多いスポーツ)はサッカー、ソフトテニス、バレーボール、卓球、陸上競技、野球、ソフトボール、水泳など、学校の運動部活動で一般的に行われているスポーツが多い。学校の授業で、もしくは部活動で行ったことがあるスポーツ(運動)の中で種目別運動・スポーツ実施率が1番高い種目は「水泳」で、年代別でも水泳は人気が高く、日本において人気のあるスポーツ(運動)であることが伺える(笹川スポーツ財団, 2012)。

【第2章】日本における水泳とボート競技

第2章では、日本における水泳とボート競技の歴史からボート競技の問題点について検討した。その結果、競技に触れることができる年齢の違い、施設や場所数の違い、系統的に競技を続けることができるかの違いの3つの相違点が明らかとなった。特に、ボートを教えることのできる指導者が少ないということがボートをマイナースポーツの枠に留める原因になっていると考えた。

【第3章】マイナースポーツの普及のための方策

第3章では、第2章で明らかとなった問題点の方策を述べた。今回は上記の3つの問題点を取り上げたが、ボート競技には他にもたくさん問題がある。特に、最も深刻な問題はボート競技のファンが少ないことであろう。しかし、地道に普及に向けた活動に取り組んでいけば、ボート競技の中からスター選手が生まれ、ボート競技の人口の増加につながっていくだろう。

【結章】

今回は主に文献資料からボート競技の問題点とその方策について検討した。その結果、競技開始年齢、環境面、競技年数についての問題点が明らかになった。しかし本研究では、その具体的に迫るための実態調査などは行っていない。そのため、ボート競技の普及に向けた方策を完全に見出すことはできていない。この点については今後の課題としたい。